

共催：国際言語文化学部国際日本文化学科
現代人間学部生活環境学科

人間文化研究科
人間文化専攻

京都ノートルダム女子大学大学院
文化の航跡研究会

雄弁と沈黙：百一夜物語の収録話
「王子と七人の大臣の物語」における
ミソジニーとホモソーシャルな絆

2026年

2月4日(水)

17:00-

会場：E401

ユージニア館4F

申込
不要

講演者

鷺見 朗子

京都ノートルダム女子大学
国際言語文化学部 教授

〈問い合わせ先〉 教育支援部学事課

☎075-706-3661

✉gakuji@notredame.ac.jp



講演概要

一般に、『アラビアンナイト（千一夜物語）』の枠物語や「女たちのずるさとたくらみの物語（七人の大臣の物語）」は、ミソジニー（女性嫌悪・女性蔑視）を主題とする物語だと考えられている。本発表では、『アラビアンナイト』の系譜に属する『百一夜物語』を取り上げ、語りとジェンダーの関係に注目しながら、そこに見られるミソジニー的要素とホモソーシャル（同性間の社会的連帯）な関係について考察する。

分析の対象とするのは、収録話「王子と七人の大臣の物語」である。なお、『百一夜物語』では「女たちのずるさとたくらみの物語」は、この題名で収録されている。

ミソジニーは、古代からインド・中東・地中海地域に広く見られた思想だとされ、『アラビアンナイト』もその例外ではない。とりわけ、女性の情欲はミソジニーと強く結びつけられて描かれることが多い。『アラビアンナイト』の枠物語では、王は王妃の不貞によって深い「女嫌い」になる。「王子と七人の大臣の物語」でも、王子を誘惑し、王を殺そうと企む側女が登場する。これに対抗する存在が七人の大臣たちである。

まず、この物語の基本構造そのものが男性中心的であり、側女対七人の大臣、そして王と王子という構図が、物語全体のミソジニー的色彩を強めていることを指摘する。次に、大臣たちが語る物語の中に見られるミソジニー的表現について分析する。さらに結末に注目し、沈黙を守り続けた王子が、雄弁な側女に打ち勝つ点、そしてその勝利が男性同士のホモソーシャルな絆によって支えられている点を明らかにする。

講演者紹介

鷲見 朗子（すみ あきこ）

京都ノートルダム女子大学 国際言語文化学部 国際日本文化学科・教授

〈略 歴〉

ノートルダム女子大学生活文化学科卒業。ミシガン大学北アフリカ・中東研究科にてM.A.を取得後、インディアナ大学比較文学研究科にてM.A.、同大学近東言語文化研究科にてPh.D.を取得。在レバノン日本国大使館専門調査員を経て、京都ノートルダム女子大学講師、准教授、あわせて放送大学客員准教授、客員教授を歴任。現在京都ノートルダム女子大学教授。2025年度より慶應義塾大学外国語教育研究センター特任教授も務めている。

専門はアラブ文学およびアラビア語教育研究。アラブ文学分野では、アラブ古典詩および『アラビアンナイト』を中心に研究を行い、特に『百一夜物語』の写本テキスト研究に取り組んでいる。

近年の主な研究業績に、Akiko Sumi, 2024, “The Leiden Manuscript of the Hundred and One Nights,” *Journal of Arabic Literature* 44 (4): pp.375-400、ならびにAkiko Sumi, 2024, “Description of Architecture in Classical Arabic Poetry from the Perspective of Interarts Studies,” in *The Routledge Handbook of Arabic Poetry*, eds. Huda J. Fakhreddine and Suzanne Pinckney Stetkevych, London and New York: Routledge, pp.55-85などがある。



Kyoto Notre Dame University

1 Minami-Nonogamicho, Shimogamo, Sakyo-ku, Kyoto, 606-0847 Japan

京都ノートルダム女子大学

〒606 0847 京都市左京区下鴨南野々神明1番地

